

火炎に生きる



火炎に生きる

加賀淳子

新潮社

検印廃止

火炎に生きる

昭和三十七年五月十一日 印刷
昭和三十七年五月十五日 発行

定価三二〇円

著 者 加 賀 淳 子

発 行 者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

印 刷 者 東京都千代田区神田神保町
塚 田 重

発 行 所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

電話東京03代表七一一
振替東京八〇八

(乱丁、落丁のものは本社又は
めの書店にてお取替えいたし)

印刷 塚田印刷株式会社 製本・神田加藤製本所

© KAGA Tokyo, 1962. Printed in Japan

目 次

生きている人形

：
：
：
：

セ

がらしあ恍惚

：
：
：
：

ニセ

火炎に生きる

：
：
：
：

四

美しい使者

：
：
：
：

一〇

雪姫あわれ

：
：
：
：

一三

黒衣の姫

：
：
：
：

一七

おとめ妻かなし

：
：
：
：

二三

宵待ち姫

：
：
：
：

二五

装
幀・カ
ット
野
口
昂
明

火炎に生きる

生きてゐる人形



旧暦の十月なかばだというのに、その日は朝から小春日を思わせるような、妙にナマあたたかい風が吹いた。

「このババがお城のおヒイさまを、はじめて見たのは……そうじゃな、もう七年か八年もの昔のことになるが……なんせ、おらの目もつぶれるほど美しゅう気高いおヒイさまじゃったなア、そのおヒイさまが、もはや十七歳にもなんなさるとは夢のようじゃ」

城下町のある山伏村と境を接している池島村の新兵衛と呼ぶ百姓家では、老母のシンが倅の新兵衛夫婦を相手に茶のみ話に夢中だった。

「お城内も町かたも祭気分のような騒ぎだど。なんでも……お屋形さまからドえらい下されものがあるそうじゃでな」

「下されものは百姓どもがまず先だと聞いたに……」

「そりやそうだ」

女房がホクホク顔をするのを老母は片手でおさえるように

「八年前このババがお城のお台所へ十日ばかりおつとめにあがっていたさいにも……役にも立たぬおらへお奥から仰山な下されものがあつた。あとで知ったことじゃが……その品々はおヒイさまのおいつけじゃったという。めったにお顔もおがめぬのに、どういうわけか……おヒイさまは台所にお出ましなされて、このババにお言葉をおかけなされた。ババの家には子どもがおるか

……とな」

「それで……ババさんどう答えた？」

「三十七になる伴が一人おります、とお答えした。そしたら、ヒイと同じような子はおらぬか、とのおたずねじゃ。おらがお答えした。その伴におヒイさまと同じ年の小娘がおりますと、な。おヒイさまはしばらくもの考えしておいでなさったが……その娘と遊んでみたいと仰せなされた」

「うちのオタミとか……」

そこで三人は声をあわせて笑い出した。

これに似たり寄ったりの会話が、この瀬谷郡を含む四郡の村々のあちこちで取りかわされていた。特に尾形家の居城のある山伏村の城下町では、年ごとに女らしい美しさを増してくる舞姫の十七回目の誕生日を数日後に迎えて、当日おこなわれる筈の祝典についての評判で持ちきりだった。

山伏の城主である尾形隼人正実秋はもう六十に手のとどく年だが、おそまきに生まれ、男の子が一人あった。それを合戦のために失ったのは、そのころ九州の北西部を切り従えて猛威をふるっていた大倉淡路守有友が、山伏城に攻撃をしかけて来たからで、世つぎの男子を初陣の流れ矢に戦死させた隼人正は、すっかり戦意をなくして大倉軍に降伏した。条件の悪い降伏ではなかったが、一郡七カ村を大倉がたに占領されたうえ、それまで独立して武威を保持していた尾形家は以後大倉家へ臣下としての礼を取るハメになった。

世つぎを死なしてからの隼人正は他人目にも気抜けして急に老人くさくなったが、それまでも

掌中の珠玉のように大切にしていた舞姫と呼ぶ一人娘を、より一層いとしむようになった。隼人正の妻は岩月の城主毛利秀和の妹で美人の噂が高かったが、舞姫が十二歳の春に病死していた。

隼人正には正妻のほかに二人の側室があったけれど、一人は病身のため世つぎを出生する資格に欠けていたし、もう一人は女盛りをすぎていたためか、これにも子がなかった。文字通り舞姫は隼人正の天にも地にもかえがたい一粒種。この貴重な一粒種にどのように立派な婿を取らせるかという一事が、隼人正の余生にとって何よりも重大な心がかかりだった。

「そなたのために新しく建てた殿舎も、もはや飾りつけを終わった。誕生日には新居へ引きうつるのじゃな」

「でも……」

「でも何じゃな？」

「母上や兄上の思い出の残る屋形から引きうつりたくはございませぬ」

「はてさて……そなたは亡き母者や兄者を思い出すゆえ、この屋形を引き払うて、どこか知らぬ山里へでも行きたいと申していたではないか」

隼人正は優しくそう云いながら、さも愛らしくてたまらぬというように、長いマツ毛にかくれた舞姫の、つぶらな瞳をのぞきこむ。

「いえ、それは……そのように母上や兄上の思い出をなつかしむ心に堪えない……と申しあげたのです」

「まあ何でもよい。わしは、そなたに三国一の立派な婿を見つけてやらねばならぬ。この尾形の世つぎを得るためにな。わしは、そなた一人が生きる望みなのじゃ」

それを聞くと、心なしか舞姫の頬から血の色が消えかけた。しかし幸福に酔っている隼人正は、娘の心の底に鳴りひびく汐ざいの音に気づかなかつた。どのように愛していても、たいせつに扱っているにしても、隼人正の頭の中には、娘は由緒ある尾形家をつがねばならぬ貴重な品物——という常識があつた。しかし隼人正の一人娘が単なる世つぎの道具でなかつたことは、それから数時間の後に起つた姫の行動をうかがえば、充分に納得の行くことだつた。

父親が舞姫の居間を去ると、姫は庭園を散策したいと呟きながら付きの女中を遠ざけた。それから数十分、姫の姿は庭の木立ちや石燈籠の間にチラチラとその色あざやかな冬小袖の色を見せていた。それが、しばらくするうち、かき消すように庭の奥から見えなくなった。それはまるで築山の裏に秘密な洞窟でもあつて、姫が突然その中へでも吸いこまれたように見えた。事実、舞姫の姿は大岩の陰になつてゐる洞の入口へ入つて行つたのである。

舞姫はしめつた地下の抜け穴を歩いてゐた。床には大きな切り石が敷きつめてある。間もなく外からの光はささなくなつたが、姫は勝手知つた道を歩くように足をいそがせた。行きどまりになつたところで、姫は壁を押した。音もなく一畳ほどの扉が開いた。不思議なことに、姫がはいりこんだのは、さきほど父親の隼人正と話をしてゐた姫の私室の一つだつた。むろん居間には誰もいない。姫はあたりの物音に耳をすましながら、押板のもう一方にある壁の下を踏んだ。音もなく壁は半転し、姫の姿はその向うに口をあけてゐる深い暗黒の奥へ吸いこまれて行つた。

思うに、この山伏城を築いた尾形家の何代目かの当主は近隣との合戦にそなえて、屋形の一部に城外へ抜け出るための秘密な通路をこしらえておいたのに相違ない。姫がこの兄の私室を使うようになったのは、兄が戦死した翌年からだから、永い年月の間に、姫はこの押板の左右に取り

つけられた秘密の扉をいつの間にか発見していたのだろう。一つの扉は庭園の奥にある築山の裏手へ、もう一つの扉は山伏城の南西を流れている音無川の岸边へ通ずる抜け穴へつづいている。舞姫がいったん庭前へ出て、ふたたび私室へ引きかえしたのは、おそらく少しでも居所を不明にして時間をかせぐ手段かと思われる。

前よりもっとジメジメした空気がよどんでいた。本丸の石垣の下あたりまでさしかかった時、向うの方に小さな灯が見えた。灯はしだいに近づいて階段の下でとまった。「姫さま……」と呼びかける若々しい声があがってきた。

「与一郎……」

答える舞姫の声は、かすかに震えを帯びた。

「お降りなされ……」

こういう場面がいままでに何回もくりかえされたのだろう。姫は男の言葉も終らないうちに石段を降りはじめた。与一郎と呼ばれた若者は、駆けあがるようにして舞姫の手をとった。階段を降りきると、与一郎は持っている手あかりを地面へ置いた。石段の二段目から通路の敷き石へかかるあたりはムシロを敷き、そのうえに厚い毛せんをひろげてある。腰をおろすのも待ちきれないように与一郎は姫を抱きしめた。

しばらく二人はそうしていた。言葉も邪魔に思われるほど、深い熱烈な感情の行き交いが二人を支配した。

与一郎は隼人正の馬廻りをつとめている原田与左衛門の長男で当年二十一歳、自分は膳部係りの下役だから、とうてい十万石の城主の姫と晴れて恋仲になれる間柄ではない。当然二人の間に

は死をかけた悲痛な恋情が燃え立っていた。

「与一郎……わたしは近々新居の方へ引きうつらねばなりません。お父上のおいつけです」

「それでは……この抜け穴へは？」

「そう、もうここへは来られなくなるでしょう」

そうなれば、もうこのように安全な、二人だけの隔離された逢い引きの場所は閉ざされてしまふほかない。悲しみと絶望が四方から二人を取りかこんでいるように感じられた。その絶望の感情が一層与一郎と舞姫を、はげしい恋情の嵐で吹きまくった。

男らしく彫りの深い与一郎の片頬が、薄灯りを受けて急に朱のように染まるのを舞姫は近々と見た。呼吸のつまりそうな口づけから、いつもと違う与一郎のあえぎを聞いた。それは「舞……舞……」と、とぎれとぎれに、男の唇を洩れていた。いままでと違った、恐怖をまじえた期待が、舞姫の純白な五朧を通り抜けた。与一郎の右手が姫の乳房をまさぐり、左手の指が乱れた小袖の裾から狂ったもののように這いあがってきたから。

「いやです！ 与一郎、何をするの……です！」

はげしく舞姫の両手は男をはねのけた。

「おゆるし……ください。舞さま、与一郎を……おゆるしください」

つめたく、かたい主従の掟が、白刃のようにするどく与一郎の心を引きもどした。思わず両手を離した与一郎は、すがるように姫へ哀願した。しかし、舞姫の十七歳の肉朧も感情も、彼女の両手や悲鳴とは逆に、与一郎の無礼な両手を、恋しく待ちのぞんでいたのだった。

「聞いたか……どえらいハメになったものだて……なんでも大倉さまからお使者がやって来て、とんでもない申し入れをしたということだが……」

「それよ、そのことだが……お城のおヒイさまも何たるお可哀そうなことか……せつかくのお誕生日のお祭も、これで一切合財フイになったというものだ。こういっちゃんんだが……あのようなカッタイ息子になあ」

翌々日の朝には、すでにこういう噂が町中を流れ、夕ぐれ時には近在の村々まで、誰一人知らぬ者もない有様になった。

隼人正や舞姫をはじめ、喜びに湧く家中の面々を急に悲嘆の底へ突きおとしたのは、あの翌日の早朝に大倉淡路守から使者がやって来て、重大な申し入れをしたからだ。淡路守の二男圖書之介の妻に舞姫を貰い受けたという使者の口上だった。

むかしは知らず、現在のところ大倉家は尾形家の主筋である。その主家からの縁談の申し出なら、両手をあげて喜ぶべきだが、相手が二男の圖書之介有信では、隼人正でなくとも二の足を踏まないわけには行かない。というのは圖書之介は誰知らぬ者もないほど有名な癩病患者だった。そのころは癩者に対する恐怖は極端にひどく、天刑病とまでいわれていた。

圖書之介は二十五になる。数年前までは近隣にまで噂の高い美丈夫だった。病身の兄右衛門尉（後に兵庫之介）と引きくらべ、筋骨たくましく文武にすぐれた勇士だったのだから、嫁にきては山ほどあった。それが癩に犯されたといって自室に閉じこもるようになってからは、そばに